

## 『金子文子』

2019年03月18日

「東京新聞」の「本音のコラム」で、斎藤美奈子氏が激賞しているのに刺激されて、鈴木裕子編の『金子文子 わたしはわたし自身を生きる』を読んだ。3部構成で、1部は、金子文子が市ヶ谷刑務所入所中の4年間に、自身の全生涯を綴った手記で「私としては何よりも多く、世の親たちにこれを読んでもらいたい」と書いている。2部は、「治安警察法違反」「大逆罪」の裁判での尋問調書である。3部は、獄中で詠んだ歌集である。想像を絶する過酷な人生を生き、反骨の塊のような思想を構築し、23歳の若さで、獄死した文子の生涯に圧倒された。目に余る嘘と欺瞞の権力に抗う力が著しく低下している今日、読み、学ぶべき本ではないか。編者は若い読者にも手に取ってほしいと書いている。

文子は、1903年（明治36年）横浜で生まれるが、両親は籍を入れた結婚でないため無籍で、就学できなかった。父は家を出、母も男との同棲を繰り返し、文子を捨てて嫁ぐ。両親に捨てられた時の怒りと悲しみを、「あなた方は本当に子供を愛しているのですか。あなた方の愛は、本能的な母性愛とやらのつづく間のことで、あとはすっかり御自分達の利益のためののみ子供を愛するような風を装っているのではないのですか」と、呪いの言葉をあげている。9歳までの間、大人たちの身勝手によって、極貧の生活を強いられている。9歳の時、父方の祖母が朝鮮忠清北道英江に住む娘夫婦の岩下一家の養女として引き取る。祖母から、耐え難い肉体的、精神的な虐待を受け、岩下一家から「女中」以下の扱いをされる。祖母から踏んだり蹴ったりされ、襟髪をつかんで、地べたをずるずると引きずられ、門の外に放り出された。空腹のまま、ふらふら歩いていると、朝鮮人のおかみさんから「麦ご飯でよければ、おあがりになりませんか。ご飯はたくさんありますから」と声をかけられた。文子はその時のことを、「朝鮮にいた永い永い七か年を通じて、この時ほど私は人間の愛というものに感動したことはなかった」と書いている。日本人が朝鮮人を軽蔑し、抑圧する様を見てきただけに、おかみさんの親切は心に深く残ったのである。しかし祖母から「鮮人の家などで貰って食べる乞食はうちにはおかれぬ」と怒られることを恐れ、辞退した。また、体罰を受け、氷点下の戸外に追いやられ、自殺を試みる。自殺を思い止まった時の時の心情を、「年端も行かぬ哀れな少女が死を決して死に損ねた。若草のように伸びあがるべきそうした年齢の頃に救いを死に求めるといふことさえ恐ろしい不自然さなのに、復讐をただ一つの希望として生きながらえたとは何とも恐ろしい、また。悲しいことであろう」と書いている。14歳で、高等小学校を卒業し、16歳の時、母の故郷、山梨に還される。しかし、そこに自分の居場所はなく、父の故郷浜松にも行くが、そこでも、生きる意味を見出すことができなかった。苦学して、医師になりたいと東京の大叔父宅に身を寄せる。新聞の売り子をするが、体力が持たず、断念する。粉石鯰の露店商、訪問販売などもする。この間、救世軍の路傍伝道に触れ、聖書を読み、礼拝にも行ったりする。また、社会主義者達との交流も持ち、彼らとの関係を深めていく。その頃の文子は「私はあまりに多くの人々の奴隷となりすぎて来た。あまりに多くの男のおもちゃにされて来た。私は私自身を生きていなかった。私は私自身の仕事をしなければならぬ。そうだ、私自身の仕事をだ」と考えていた。そのような時、朴烈の詩を読み、力強さに感動する。そして、彼と出会い意気投合する。二人は理解し愛し合い、生死を共にしようと約束する。手記は、ここで終わっている。地獄のような少女時代を過ごした底辺から、欲と打算に満ちた大人と社会のあり方を見て、自分自身の生き方をしたいと目覚めたのである。

苦しい子ども時代を過ごした文子は、差別と抑圧を受けてきた朴と心を通わせ、19歳で同棲生活に入る。雑誌『黒濤』『太い鮮人』などを刊行し、虚無主義的、反権力主義的（無政府主義的）な思想を公表する。1923年、関東大震災の混乱の中、「治安警察法違反」で逮捕、また、天皇、皇太子殺害計画をしたとの「大逆罪」で1926年に死刑判決を受けるが、恩赦によって無期懲役に減刑される。獄中縊死と伝えられているが、定かでない。文子は弁護士を不要とし、一人で裁判長の問いに応じている。自分の人生を獲得した確固たる尋問調書と裁判長に宛てた書簡から、文子の思想を紹介したい。

文子の立ち位置は、「つまり私の今のこの思想は他人から植込まれたものではなく、自分自身の体験から生まれたものであるように思います」という証言にある。また、「私はかねて人間の平等ということ深く考えております。人間は人間として平等であらねばなりません。そこには馬鹿もなければ、利口もない。強者もなければ、弱者もない。地上における自然的存在たる人間の価値からいえば、すべての人間は完全に平等であり、したがってすべての人間は人間であるという、ただ一つの資格によって人間の生活の権利を完全に、かつ平等に享受すべきはずのものであると信じております」「私は大正八年中朝鮮において朝鮮の独立騒動の光景を目撃して、私すら権力への反逆気分が起り、朝鮮の方のなさる独立運動を思う時、他人のこととは思得ぬほどの感激が胸に湧きます」と言う。子どもの時から、生きることを拒否された差別と抑圧の中から、平等への渴望を抱き、人間の尊厳への憧れを抱いていたのである。裁判においても、「お役人方君らの前に改めて勇敢に宣言しましょう。『私はね、権力の前に膝折って生きるよりは、むしろ死してあくまで自分の裡に終始します。それがお気に召さなかったらどこなりと持って行って下さい。私は決して恐ろしくはないのです。』『君らと妥協する』『改心して社会に順応して生きる』今となって君らと妥協できるなら、私はね、社会にいた時、すでに妥協していたはずです」と、死を賭して、権力に妥協せず闘うと断言している。

「私の計画を突き詰めて考えてみれば、消極的には私一己の生の否認であり、積極的には地上における権力の倒壊が究極の目的であり、またこの計画自体の神髄でありました」と言う。しかし、問「被告は生を肯定するか。」 答「生を強く肯定します。」 問「生を強く肯定すれば虚無主義と両立せざることにならざるか。」 答「自分の抱いている虚無主義と言えらるなら生と両立します」と応じている。そして、その両立は、「私は生を肯定する。より強く肯定する。そして、私は生を肯定するがゆえに、生を脅かそうとするいっさいの力に対して憤然と反逆する。それゆえに私の行為は正しい—と」と証言している。

宗教的な尊厳を保つため科学的な研究を禁止するキリスト教や社会主義者を名乗る者たちの自堕落な生活ぶりにも失望している。権力に反逆することを善と考えたのである。

文子の天皇制に対する批判は厳しい。問「皇室を権力と見ますか。」答「権力の総帥とみております。」問「権力の総帥として、その他に仁慈の府として皇室を認むるを得るや。」答「これを認む。ただし、侮蔑をもって認むるのである。」「地上の平等なる人間の生活を蹂躪している権力という悪魔の代表は、天皇であり皇太子であります。私はこれまで、坊ちゃん（皇太子）を狙っていた理由はこの考えから出発しているのです」と、天皇制批判は徹底し、人間の絶対平等を求めている。

「生活者」の視点で権力の横暴を見抜き、人間への愛と、権力への反逆を生き抜いた文子の生涯は現代人に大きな衝撃を与え、「あなたはどこに立つのか」と問いかけて来る。